



当たらずとも いえども 遠からず

新連載

編集委員・大内雅博 OUCHI Masahiro (高知工科大学助教授)

ひとことと比べて、わが国における建設工事がだいぶ減ってきたと感じる。周囲からはあまり景気の良い話が聞こえてこない。

では実際、建設工事はどの程度減ってきたのだろうか。定量的に示したい。

「建設工事の量」を定量的に示す指標の1つとして、「建設投資額」があげられよう。そこで早速、1960(昭和35)年度から2005年度までのわが国における建設投資額の推移を示してみよう(図-1)。なお、この投資額は、物価変動の影響を除外するため1995年の実質価格表示である。また、2003、2004年度は見込み値、2005年度は見通し値である。

確かに、バブル崩壊の1990年以降、建設投資額はひたすら下降線を辿っている。

しかし、ちょっと待ってほしい。バブル絶頂期の1990年度の建設投資額こそ確かにピークを記録しているが、それ以降のいわゆるバブル崩壊以降の建設投資額がバブル以前と比べて遜色ないではないか。たとえば、1998年度の投資額はバブル開始年の1987年度とほぼ同額である。

また、当時幼稚園生だった私(昭和43年=1968年生れ)が体験したわけではないが、第一次オイルシ

ョック直前の景気の良さはかなりのものだったという話をよく聞く。にもかかわらず、1973年度の投資額は2002年度のそれとほぼ同額である。実感とは一致していない気がする。

要するに、「建設工事量の大小」を云々するのにお金の指標だけでは不十分ということなのであろう。

ここで、投資額だけではなく成果物の量にも着目してみることにした。建設工事における成果物の量とは、でき上がった構造物なり建築物の量である。

しかし、その量を計測することは非常に困難というか手間がかかる。

そこで、構造物なり建築物の量として、使用した建設材料の量を指標として用いてみることにした。2000年における、わが国の代表的な建設材料(構造部材として使用されるもの)の1人当たりの使用量を示す(表-1)。

表-1 わが国における主要建設材料の使用量(2000年)

	消費量	消費金額
コンクリート	1.9 m ³ /人	19,000 円/人
鋼材(建設用)	0.026 m ³ /人	7,000 円/人
木材(建設用)	0.11 m ³ /人	5,500 円/人

建設材料として使用されているのは、容積の点では圧倒的にコンクリートである。建設工事の成果物のほとんどがコンクリート構造物や建築物であるといつて良い。すなわち、コンクリートの消費量を求めれば、それが建設工事による成果物の量と見なしでも大きな外れにはならないであろう。なお、土構造物の量についても、いずれ何らかの形で推定する必要があると考えている。

さて、実はコンクリート全体の生産量なり消費量を網羅する過去からの統計資料は不十分なのが現状である。一方、コンクリートを構成する最も重要な材料(これなし



図-1 わが国における実質建設投資額の推移(1995年価格)

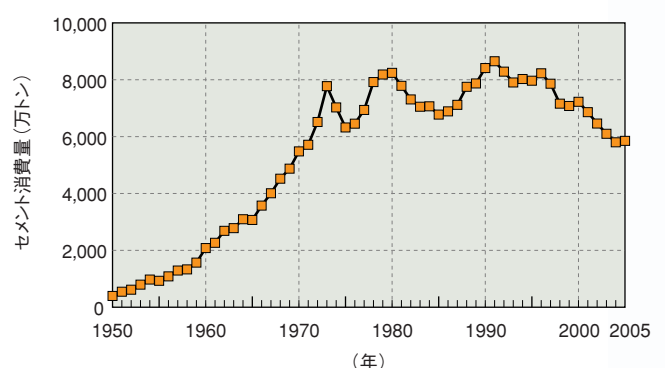


図-2 わが国におけるセメント消費量の推移

第 1 回

建設工事の量？

ではコンクリートにはならない)であるセメントについては、製造量から販売量までしっかりした統計が整備されている。

そこで、**当たらずといえども遠からず、セメント消費量 → 製造したコンクリートの量 → 建設したコンクリート構造物・建築物の量 → 建設した構造物・建築物の量 → 建設工事の量**と仮定してみた。ここでは、コンクリート中に占めるセメントの量(これを単位セメント量という)をほぼ一定と見なしている。

早速、1960年から2005年までのわが国におけるセメント消費量の推移を求めてみた(図-2)。ただし、2005年の値は推定値である。

いかがだろうか？ だいぶ実感に近くなったと思う。

さて、今回の統計データのスタート時点である1960年のわが国の人口は9,341万人あまり。一方、2000年には1億2,693万人と、35%あ

りも増えている。つまり、質的に変化がなくても、人口の増加によるものだけでも国全体のトータル量が大きくなってしまう。

そこで、セメント量を各年のセメント消費量をそれぞれの年の人口で割り、一人当たりセメント消費量の推移を求めてみた(図-3)。

だいぶ近年の値が小さくなったことに気づかれると思う。これによれば、わが国の建設工事のピークは1973年、すなわち第一次オイルショックの直前ということになり、いわゆるバブル期は三番目に大きいピークという位置づけになる。

総量でみれば2005年の建設工事量は1971年の水準であるが、一人当たりになれば1968年の水準にまで戻ってしまったということがができる。

ここでもう一声。それでもまだ1968年のほうが建設業には勢いがあつたはず、と思われる方が多い

と思う。私もそう思う。

それについては、以下のように考えれば良いのではないか。ある産業の勢いはその売上高なり生産量の増加率で表現されると聞いたことがある。そこで、毎年のセメント消費量について、前年からの増加率を求めてみた(図-4)。

おそらく、われわれの建設市場に対する見方なり気分というものに一番近いのがこのグラフであろう。1965～69年のいざなぎ景気による好調さと、オイルショックによる落ち込んだ雰囲気、そして1990年のバブル崩壊により21世紀まで持ち越された沈滞ムードによく対応していると思う。

2001年から2004年の間、わが国のセメント消費量は連続して前年を下回った。これは過去に例がないことである。一方、これが前年よりも上回れば、消費量の絶対値はともかく、気分的にはずいぶん違うはずである。

謝辞：セメント消費量についてのデータは(社)セメント協会、(株)セメント新聞社よりご提供いただきました。心より御礼申し上げます。

データ出典
建設投資額：国土交通省ホームページ
<http://www.mlit.go.jp/toukeijouhou/chojou/index.html>

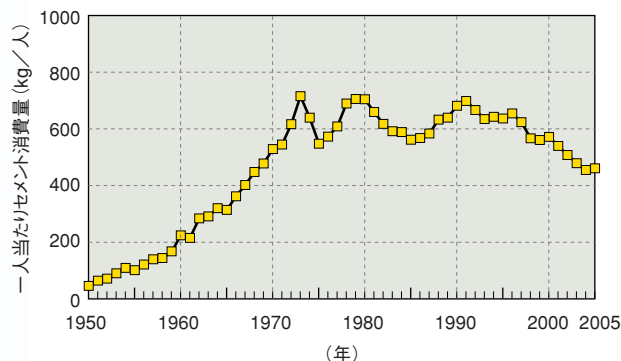


図-3 わが国における一人当たりセメント消費量の推移

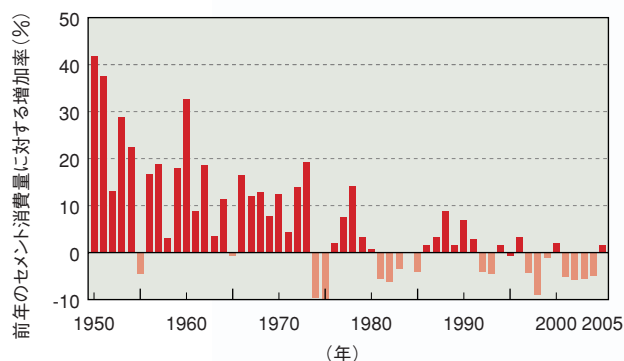


図-4 わが国におけるセメント消費量の増加率

(キャラクター&外枠デザイン：宇野洋志城)